

## 東シナ海域における陸起源物質負荷が生物環境に及ぼす影響の解明

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010191">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010191</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



# 東シナ海域における陸起源物質負荷が生物環境に及ぼす影響の解明

西海区水産研究所 東シナ海海洋環境部

## 研究の背景・目的

1. 近年、東シナ海の大陸棚域や有明海では、流域開発等に伴う有機物負荷量の増加や赤潮の頻発などの漁場環境の悪化や、漁獲量の低迷などが問題となっています。
2. 東シナ海や有明海の大河川（長江、筑後川など）からの物質負荷変動が沿岸域生態系に及ぼす影響を明らかにし、沿岸漁場環境の保全に役立てることを目的とします。

る懸濁物質は、大部分が出水時に集中して負荷されることが分かりました。また、その増減には、一定の傾向は認められませんでした。

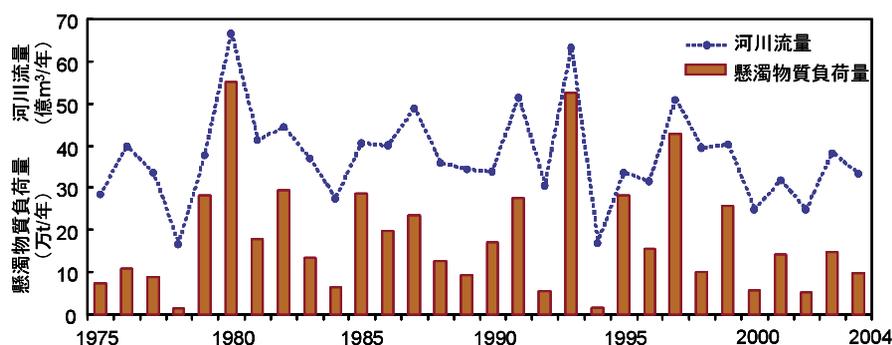
2. 長江河川水の溶存態無機窒素濃度は、近年顕著な増加傾向を示していることが知られていますが、夏季には、長江から流出した低塩分水が東シナ海大陸棚域の表層に広がるため、このことが、東シナ海の北部大陸棚域表層の夏季の溶存態無機窒素濃度にも影響を与えていると考えられます。

## 研究成果

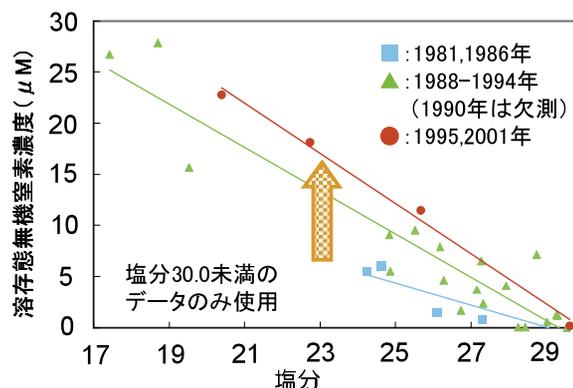
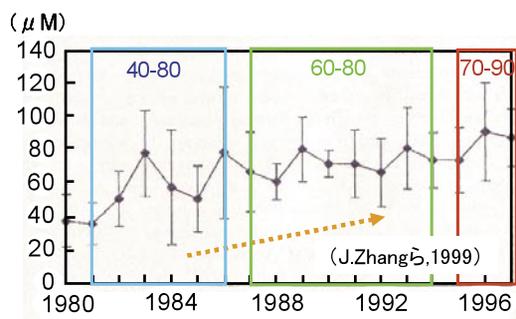
1. 過去30年間の筑後川から有明海への懸濁物質負荷量を、観測結果をもとに年毎に推定しました。30年間の年間流量の変動幅が約4倍であるのに対し、懸濁物質の年間負荷量の変動幅は約40倍に達する大きなものであること、筑後川から供給され

## 波及効果

我が国周辺海域における河川負荷物質量の評価及び適正な制御を行うための重要な基礎データが得られ、生態系モデルの開発や河川・陸域管理による沿岸漁場環境保全手法の開発にも貢献します。



筑後川流量と懸濁物質負荷量推定値の長期変化



長江（南通）における溶存態無機窒素濃度（左）及び東シナ海大陸棚北部表層における夏季（7，8月）の塩分と溶存態無機窒素濃度の関係（右）の推移